

## 自然石のお墓

第7回では自然石に自筆の碑文で入賞したのは岡山県倉敷市の鴨川 恵美子さん。夫が亡くなり遺骨もわが家に安置していましたが、散骨もいまいちそぐわず、結局土に還すのが最良との考えに至り、自然石で、表題は自筆で書いて刻んでもらいました。裏面には西暦で生年と没年を刻みました。施工は、地元の石材店にお世話になり、墓地は昔から所有していた向山です。



同じく第7回に愛知県一宮市の鷺津周二さんが自然石の墓石で入賞した。墓はなぜ必要なんだろうか？という疑問が以前からあった。しかし、その立場になったとき、とりあえず必要なと自己納得した。では、どのような形にするか。答えはすぐに出た。自然石はカイルスを表し、自筆で「一切は衆生なり、悉有は佛性なり」を描いた。手前には佛足石を置いた。色々なものを合わせた、即ち混沌。しかし、佛の教えの根源のような気がする。石材店もこのような形は初めてであり、共鳴していただいた。合掌。



第8回では自然石に桜の花ビラをレリーフした素朴、愛らしいお墓で群馬県北群馬郡の柴崎 孜さん（当時 54 歳）が入賞した。

＜「夫婦2人だけの小さな可愛らしいお墓—夫婦(めおと)墓みたいにしてほしい。墓石も自然石をコロッと置く、道祖神みたいな素朴なのがいい。」という希望を石材店さんに話したら、願いに近い石を捜して下さいました。ついでに「お墓らしくないけれど桜の花びらを彫ってください。」という願



いも叶えていただきました。夫婦墓にはできませんが、納骨は夫婦単位にするように作っていただきました。父母が2人で桜の花を見ているようで、うれしいお墓になりました。>

第12回では、静岡県榛原郡の堀朝生さんが自然石に毛筆でやわらかさ表現したお墓で入賞した。母が亡くなり、お墓を建てることになりましたが、お墓を建てるということは初めての経験で、今まで意識していなかった事もあって、何をしてもよいのか全く見当が付きませんでした。他人と同じもので良い、他人任せ、という安直な考えもありますが、どうせ建てるのなら、故人への想い、先祖を敬う想いが後世に伝わるように、ということで考えを進めました。まず手始めに、頭の中にあるお墓のイメージ「暗い、寄り付きたくない」という遠い存在であったお墓を、「故人を偲ぶ、語りかける、心がなごむ、大地へ返る」と言うキーワードで、デザインを考えてみることにしました。



素材としては自然石（伊達冠石）の持つ柔らかな感じ、文字としては毛筆の持つ温かみ、この二つで先のキーワードを表現してみました。お蔭様で、石材店のスタッフ、書家の先生、他皆様のご協力により、形だけの「先祖代々・・・」にはならず、「こころ」（碑銘は「おだやかに こころ おだやかに」）のあるお墓が出来たと思います。あの世のマイホームが完成いたしました。感謝です。

第14回では、世界で一つの墓石、真心こもった自然石のお墓で、宮城県仙台市青葉区の若生京子さん(当時86歳)が入賞した。茶道の勉強をしていた30年ほど前に、京都・南禅寺の管長さんのお話をお聞きする機会がございました。その時のお話で印象深かったのは○（下が欠けている）「無一物」のお話でした。禅の言葉で、一切の煩惱から離脱した境地をさすそうです。以来、茶道の教えでもある「人間は丸い心を持ち、欲を出さない」の教えを心掛け生きてきました。その想いを託して、墓石には○「無一物」を刻みました。先祖の供養を、世界で一つの墓石として。真心こもった自然石で仕上げてくださいました。

第14回では、世界で一つの墓石、真心こもった自然石のお墓で、宮城県仙台市青葉区の若生京子さん(当時86歳)が入賞した。茶道の勉強をしていた30年ほど前に、京都・南禅寺の管長さんのお話をお聞きする機会がございました。その時のお話で印象深かったのは○（下が欠けている）「無一物」のお話でした。禅の言葉で、一切の煩惱から離脱した境地をさすそうです。以来、茶道の教えでもある「人間は丸い心を持ち、欲を出さない」の教えを心掛け生きてきました。その想いを託して、墓石には○「無一物」を刻みました。先祖の供養を、世界で一つの墓石として。真心こもった自然石で仕上げてくださいました。

